

^{うるわ}**麗しき、格好わるき土木**

藤井 聡

皆様も経験おありのことと思うが「なぜ土木に入ったか？」なる話題に及ぶことがしばしばある。この話題に及ぶ度に土木に何の関心がなく土木工学科に入学したいなどとは一切思っていなかった高校の頃を思い出す。もう少し正確に言えば、大学ごときに心底満足できるようなものがあるなどとは到底考えておらず（済みません、これは当時の放言だということでご容赦頂ければ幸いです——）さらに言うなら少なくとも筆者は大学に行くということ自体が何だか人生の敗北であるというような感覚を持ち合わせていた——なんて事を書いてしまうとホント恥ずかしい限りであるが、そんな恥ずかしい感覚を持っていたのは筆者だけという訳でもなく、いわばそういう時代の空気みたいなものがあったように思う。だから、大学の学科なんてもう何でもいいやなる気分の下ただ漫然と土木工学科に入学したのであった。

とはいえ、よくよく考えれば筆者にも一つだけ必然性みたいなものがあったようにも思う。八十年代といえばバブル真っ盛り、何もかも浮かれています高校ごときですらデーシーブランドだデスコだなどと言っては浮かれています。そんな空気の中では、「土木」なるものは人気無きものの代表のようなカッコ悪くダサイ学科であった。事実、周りの友人達は皆「なんで土木なの？」なる反応であった。が、いくらそう言われても、筆者は何とも思わなかった、というよりもむしろそう言われているからこそ土木でいいや、なる意を強くしたように思う。

何とも情けない必然性であるが、今から思い起こすに「カッコわるいと言われているが故に土木」なる気分はあまりにもひねくれてはいるが——重ね重ね、お恥ずかしい——、その部分はさておき、少なくとも「カッコ良いとか悪いとか何と言われようが土木は土木」なる部分については当時も今も変わらずに感じ続けているように思う。そして、「仕事」にカッコ良さを求める人物に遭遇すると薄気味悪く、気色悪く感ずるのも昔も今も変わらない。そしてその感覚については、僭越ながら多くの土木の方々と共有しているようにも思う。もう少しきちんと言うなら、「自らの仕事に誇りを持っている」けれども、それは「カッコ良いとか悪いとかの次元」とはまた別の話であって、むしろ「仕事にカッコ良さを求めるような人間を軽く子バカにしちゃう」ような空気が土木にはあるように思うのである。

なんとも^{うるわ}麗しい業界ではないかと思う。

今から思うに、当時の筆者は「土木」とは何かを何も理解していなかったが、カッコ良さとか悪さとかの皮相的な浮き世の虚構性を暴き立てるある種の凄みを秘めた真実が「土木」という言葉の中に潜んでいるように感じたのではないかと思う。もちろん、一般の方々はそんな事を全然理解しないのだろうなあとも思うが、それもまた土木の土木たる所以だとも言えそうである。無論、この手の話しは（例えばヲタクの様な）「独りよがりのカッコ悪さ」に繋がる危険もなくはないのだが、そうは易々とはならないところがまた、リアルな土木の世界の^{うるわ}麗しさなのだろう、と思うのである。